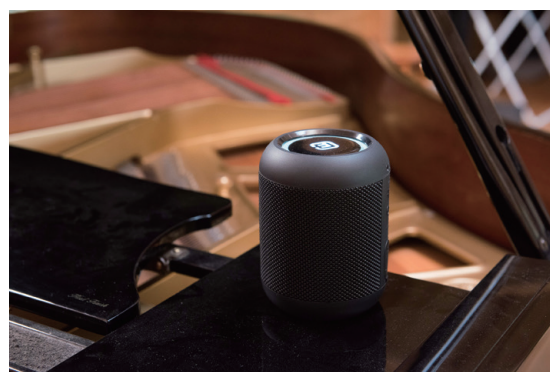


40代半ばにして 作曲家・ピアニストとして生きることを決意



【京都・亀岡発】京都駅からJR嵯峨野線でおよそ30分。さらに車で亀岡市郊外の山あいの道をしばらく上っていくと、自然の手触りが感じられるヒビノさんのスタジオが姿を現わす。取材中、528Hzの音楽とはいかなるものかと考えていたら、ヒビノさんが小さな筒形のスピーカーをスタジオ内にいくつか配置しはじめた。豊かな新緑に彩られた戸外を眺めつつ、しばらくその曲の世界に没入する。そして、曲が終わったとたん、現実強く引き戻された気がした。ここで初めて、その効果が実感されたのだ。

(本紙主幹・奥田芳恵)



父の残した借金返済の後 ライブハウス経営を成功させる

芳恵 ヒビノさんは、2015年に「心と体を整える～愛の周波数528Hz～」でCDデビューされています。このメジャー・デビューはおいくつのことですか。

ヒビノ 54歳ですね。

芳恵 失礼ながらだいぶ遅咲きかと思うのですが、「528Hz」については後ほどお話しいただくとして、まずはここに至るまでの道筋についてお話しいただけますか。

ヒビノ もともと音楽は大好きで、入学した関西学院大学では軽音楽部に入りました。歌手になんたくてボーカル志望だったのですが、同学年にその後シンガーソングライターとしてデビューし、いまはニューヨークでジャズピアニストとして活

動する大江千里、一学年上に作曲家でピアニストの羽毛田丈史さんがいて、なかなか壁は厚かったですね。

芳恵 ということは、大学卒業後、すぐに音楽の道には進まなかったのですね。

ヒビノ そうですね。当時はまだバブルで景気がよかったこともあり、ピアノバーやレストランなどの飲食店経営に携わりました。祖父が乗馬クラブを経営していましたし、父も滋賀や京都で飲食



PROFILE 1961年、滋賀県生まれ。81年、関西学院大学在学中より本格的にピアノと作曲を始める。2013年、世界でも手付かずだった528Hzの響きを生かした演奏活動を開始。15年1月、「心と体を整える〜愛の周波数528Hz〜」でメジャー・デビュー。528Hzを音楽理論や医学的観点から作曲。その手法が高く評価され、日本レコード大賞企画賞を受賞する。528HzシリーズアルバムはANAとJALの機内音楽として採用され、また病院や老人ホーム、サロン施設、亀岡市役所等でも取り入れられている。18年7月、京都・亀岡に森の音楽スタジオ「MOON studio」を創設。京都・かめおか観光PR大使に就任。



構成／小林茂樹
text by Shigeki Kobayashi

撮影／福永浩二
photo by Koji Fukunaga
2023.4.21／京都府亀岡市のMOON studioにて

チェーンを展開していたので、そうした商売人の血筋の影響もあったのだらうと思います。

芳恵 まずはビジネス面で才覚をあらわしたと。

ヒビノ ところが、私が32歳のときに父が亡くなったのですが、亡くなってみて初めて、父が大借金を抱えていることがわかりました。その返済をするのに10年以上かかったんです。銀行取引停止となったため新たな借入を起すこともできず、バブル崩壊によって事業も縮小せざるを得ませんでした。

芳恵 たいへんな30代を過ごされたのですね。

ヒビノ そんなことでどうしようかと思っていたら、滋賀の浜大津にあった店舗の大家さんから「ワンフロアまるまる空いているので何か商売はできないか」と持ちかけられ、ライブハウスを開くことにしたんです。

芳恵 いよいよ音楽との接点ですね。

ヒビノ いや、それはまだ先の話です。新しいライブハウスを成功させるためには、ふつうにやってもダメです。そこで私が料理好きということもあって、ミュージシャンたちに美味しい食事をつくってタダで提供したんです。胃袋をつかむ作戦ですね。そして、前日に移動してくるバンドには楽屋に宿泊してもらうようにしました。彼らにとっては経費も浮きますし、ご飯を楽しみにして来てくれます。この作戦は見事に功を奏し、けっこう有名なバンドが演奏してくれるようになりました。

芳恵 ちなみに、どんなバンドが来ましたか。

ヒビノ たとえば、MONGOL800や175R（イナゴライダー）などですね。彼らは全国ツアーをしているので、そのポスターなどにうちのライブハウスの名前が入ります。するとファンの方は、北海道の会場でも沖縄の会場でもその名前を目にすることになるわけで、このライブハウスはファンの方々に広く認識されるようになったんです。

芳恵 すばらしいアイデアですね！

他人のプロデュースではなく 自分の才能で食べていきたい

ヒビノ でも、あるとき、ふと我に返りました。10年後の自分の姿が見えてしまったのです。

芳恵 ライブハウスを成功させたのに？

ヒビノ 平均して月間26日稼働というすごい結果を収めたものの、実は収益として手元に残るのはドリンク代の500円のみで、それ以外の売り上げはすべてイベンターの取り分となっていたのです。

そのとき見えた10年後の自分は、会場の入り口でその500円を若いお客さんからちまちまと受け取っている姿でした。このままではいけないと思いましたね。

芳恵 それは、ヒビノさんがやりたいことではなかったと。

ヒビノ はい、それに気づいたということですね。そして、滋賀から飛び出して東京か大阪でビジネスを成功させたいという気持ちになりました。でも、滋賀のライブハウスを成功させたというだけでは強力な実績になりません。

そんなとき、びわ湖バレイというスキー場の方から、イベント企画の依頼がありました。スポーツ離れと少子化、温暖化などの影響で、スキー場に集客できない状況を何とかしたいと。

芳恵 どのようなイベントを仕掛けたのですか。

ヒビノ 当時流行していたレゲエで踊るイベントです。3年間で4回興行し、延べ4万人を動員しました。

この実績をもとにしてどこに打って出ようかと考えていた矢先、かつての同級生でカフェチェーンやホテルなどを展開する上場企業の経営者から声がかかります。それまで仕事の縁は一切なかったのに、わざわざ事務所を用意してくれて、私はヒルトン大阪のディナーショーや堺まつりの総合プロデュースなど、大きなイベントの仕事に関わることになります。

芳恵 お話をうかがっていると、次々に音楽やイベントプロデュースのお仕事が舞い込んできて、引く手あまたという感じですね。

ヒビノ そういうお話をいただくことはありがたいのですが、いくらイベント制作の仕事を続けても同じことの繰り返しという側面は否めません。

40代半ばになり、かつて大学時代に志したピアニストや作曲家として生きていきたい、他人のプロデュースではなく自分の才能で食べていきたいという気持ちが強くなってきました。

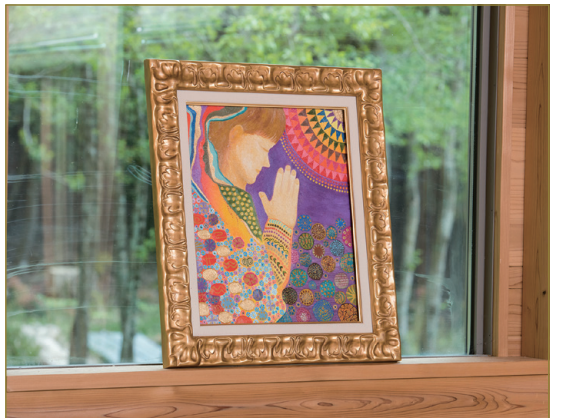
芳恵 ついに、音楽家として生きていこうと決意されたのですね。

ヒビノ そうですね。年齢的にもこれがラストチャンスではないかと考えました。ただ、ピアニストや作曲家になるにしても、現実を見たらどのジャンルも満員だったのです。

芳恵 満員？

ヒビノ クラシックもジャズもポップスも、私が入って活躍する余地がないように感じたのですね。

芳恵 どのジャンルでも、新規参入することは容



ヒビノさんが描いた油絵 「祈り」

昨年10月にリリースされたオリジナルアルバム「INORI」のCDジャケットに使われた作品。TSURUGI名義で描かれたこの油絵のイメージから曲をつくると、ヒビノさんは説明する。「全部自分でやりたい」という気持ちが、楽曲と絵画の世界観の一致をもたらしたのである。

易ではないと。

ヒビノ そんなとき、私の頭に浮かんだのはもともと興味をもっていた周波数のことでした。150年前の昔から「ラ」の音は440Hzと決められているのですが、音の周波数と人間の自律神経には密接な関わりがあるといわれているんです。

芳恵 なるほど。それが冒頭でふれた「528Hzの音楽」の話につながっていくのですね。後半では、そのあたりのお話を詳しくうかがいます。（つづく）

BCNは「ものづくりの環」を支え
育むメディア企業です

使う人

売る人

つくる人

——「ものづくりの環」の詩——

ものを使う人がいます
ものを売る人がいます
ものをつくる人がいます

いつの時代も私たちは生活の心地よさを求めます
その意（おもい）が新しいものを生みます

使う人、売る人、つくる人——
私たちは「ものづくりの環」のなかで
すべての人の心が豊かになることを願っています

株式会社 BCN

<http://www.bcn.co.jp/>

※この記事は、BCN+Rの「千人回峰（対談連載）」で公開中です。
<https://www.bcnretail.com/hitoarite/>